『内側から見た富士通』
～「成果主義」の崩壊～

城　繁幸 著
光文社　952円

システムは形だけ導入しても上手くいかないことをあえて示す

評者／宮﨑　利行
労働政策研究・研修機構アドバイザリー・リサーチャー

およそ一〇年程前から、長期雇用、年功序列型処遇システム等を柱とした日本型雇用慣行の行き詰まりと、それに代わるものとしてアメリカ型能力主義あるいは成果主義管理制度の導入が関心を集め始めた。多くの日本企業の経営者たちはきそってこのアメリカ生まれの新しい管理制度の導入に走った。丁度、バブル経済が崩壊し、経済のグローバル化が叫ばれ、規制が緩和され始めたころである。

この成果主義管理制度の導入で最も世間の注目を集めたのは富士通であろう。日本を代表するIT関連のリーディングカンパニーでの試みは、マスコミにも、経営雑誌にも頻繁に取り上げられた。

その富士通で、一体何が起こったのか。本書は、富士通で実際にこの管理制度の運用に関与した筆者（現在は退社）が、制度導入により引き起こされたさまざまな問題点を赤裸々に表したものである。

本書は、第一章急降下した業績、第二章社員はこうして「やる気」を失った、第三章社内総無責任体制、第四章「成果主義」と企業文化、第五章人事部の暗部、第六章日本型「成果主義」の確立へ、の六章から構成されている。

シリコンバレーの視察という制度導入のきっかけからはじまり、制度を運用する際の理念と実際との矛盾、それらが従業員に及ぼしたマイナスの影響、それに対する人事部の画策等々が、具体的なケースを紹介しながら述べられている。

日本の産業社会は、各種の経営管理思想や手法をアメリカから輸入し発展してきた。

この成果主義管理も例外ではない。異文化の風土の中で生まれ育ったシステムは形だけ導入しても、上手くいかないということを、本書は明示している。管理制度のみならずそれ以外の分野でも、また一企業だけの問題ではないということをも、われわれに警告している。

『戦争と平和』

高遠菜穂子 著
講談社　1,575円

平和のための戦争などありえない。報復は報復をよぶ。人間愛だけが人類を救う

評者／市橋誠之助
東京書籍㈱社友会理事

高遠さんらが、イラクで武装勢力に拘束されたことは、映像等で、われわれには生々しい。解放後、帰国したあとも、彼女が、重篤なPTSDに患っているのは、拘束中の恐怖そのものにあるとのマスコミの報道には、納得できなかった。

本書を一読して、それもあるにしてもやはり本人は、再びイラクでの人道支援

『日常生活の冒険』

奥井禮喜 著
（有）ライフビジョン　1,000円

働くことを今一度内省させる教養書

サブタイトルに「うんちく笑説」とあり、「小説というには……余暇の手慰みと批判されるかも」とあるが、これはけだし、「男もすなる日記というものを」の伝でもあろう。

本書は、三六歳になる難波くんの職場を中心とした日常瑣事の物語りといいたいが、さにあらず。「うんちく」とあるように、著者の才気煥発ぶりを遺憾なく表した労働講話といった方が正鵠を得ているのではあるまいか。

その証拠に、『貧乏物語』『女工哀史』労働組合法第二条、高野房太郎、労働基準法第三二条、第三六条、サービス労働、労働協約、少子高齢化、マズローの欲求五段階説、裁量労働、整理解雇の四要件、『怠ける権利』ときては、そこいらの大学の労働教養講座より奥が深い。願わくは、リストラについても触れて欲しかったところだが……。

『ビジネスのサムライ』

小野三郎 著
日経BP社　1,470円

日本人の精神構造の再構築を促す

終戦により伝統的文化から民族の誇り活動ができなくなるのではないか、慕ってくれた戦災孤児であるストリート・チルドレンに再び会うことができないのではないかという絶望感の方が、主たる原因であると思っていた。彼女は、また機会をえて、イラク行きを実行するという。本書のサブタイトルの「それでもイラク人を嫌いになれない」というところに、並々ならぬ決意がうかがえる。

本書は、拘束（本年の四月七日～四月一五日）された四度目のイラク入りの前にも、三回に亘ってイラクで人道支援活動を行っている。一回目は、昨年の五月一日～五月一八日、二回目は、五月三〇日～七月一七日、三回目は、一一月一八日～今年の二月一三日までと、豊富なイラクでの体験を重ねている。

昨年の三月二〇日、米英軍のイラク攻撃が始まって、四月九日にはバグダッドが制圧された。

死者は、米軍一一〇〇人に対して、イラク人は一〇万人という。制圧後も、テロ組織鎮圧という名目で戦乱が続きイラク人の犠牲はあとを断たない。戦前、戦後を通して、高遠さんが実際に目撃した、イラク国内の現状が、各頁ごとに詳しく描写されている。日本人には好意的だったイラク人に変化が起り、サマワへの自衛隊の駐留の実態（軍服と武装スタイルできたこと）への疑念と反発、イラク国内での過激派ばかりではなく、通常のイラク人の反感も昂まり最悪の事態となっている、と。

高遠さんに言わせると「イラクの人々は、雇用と医療医薬品、安全な生活と恒久の平和とを求めているのになぜなの」。

終戦後、鉄鋼メーカーでビジネス・サムライとなった著者は、「残業代はいらない」とうそぶき、一万人合理化計画を推進するなど、武士道精神でわが国の復興に邁進した。日本の明日を担うリーダーたちに武士道に回帰することを促す一書である。